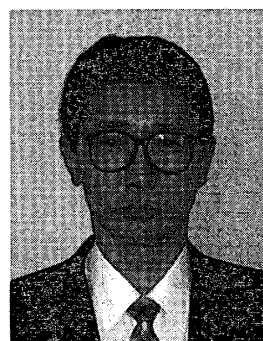


自然と共生するアウトドアライフを楽しむために

武蔵丘短期大学助教授 浦田 憲二

現代生活とアウトドアライフ

現代生活をいくつかの言葉で言い表わそうとすると、「機械化」「自動化」「分業化」「合理化」といった言葉が浮かんできます。私たちの生活は、様々な道具が開発され、便利で効率のよい暮らしがもたらされてきました。洗濯や食器洗い等は自動化され、掃除も勝手に掃除をしてくれる掃除機が作られるようになってきました。日常の生活の中で、私たちは自分の手や足を動かさずに様々なことができるようになってきました。暑さや寒さにたいしてもボタン一つで、あるいはスイッチを入れるだけで快適な生活を過ごすことができるようになりました。



労働環境においても、労働時間の減少に伴う自由時間の増加や分業化、自動化により労働形態は大きく変化してきました。ある意味人間も機械の一部となることで、合理的で効率のよい労働が進められてきています。

そのような現代社会にあって、近年アウトドアライフが爆発的ブームとなっています。多くの人が海や山へと出かけていくようになりました。また様々なアウトドア用品が販売され、その売り上げを伸ばしています。例えばテントやバーベキューセット、スキーやスノーボード、カヤックやマリンスポーツ用品等、不況といわれる中であってアウトドア関係の市場は年々大きくなってきているといわれています。またアウトドアファッションもその機能性やデザインが受け入れられ、タウンウエアとしても広く用いられるようになってきました。これらは都市環境の開発の中で、失われてきた自然に対する憧れや回帰の表れだともいわれています。

その反面、アウトドアブームの影で自然環境への影響も懸念されています。多くの人が海や山へくり出してくことで、その自然環境が破壊されてきているということです。たくさんの人たちがアウトドアライフを楽しんだ後に残されたゴミの山、踏み荒らされた野山、洗剤や油が垂れ流された川や湖、自然を楽しむにきた人たちが自然を一番破壊しているという批判も聞かれます。

また自然環境の変化、あるいはアウトドアライフについての知識や経験が足りなかったために事故が起こり、楽しいはずのアウトドアライフが、一転悲劇になるという事態も起こってきています。

そのような現状の中で、自然環境理解のためのプログラムや自然保護の啓蒙活動等が広く展開されるようになってきました。また様々なアウトドアスポーツを安全に楽しむための講習会やスクールなども盛んに行われてきています。

自然の中で、安全に楽しく過ごすために、そしていろいろな楽しさを私たちに与えてくれる自然と、いつまでも共生していくための方法について考えてみたいと思います。

アウトドアライフの魅力

アウトドアライフの魅力とは何でしょうか？ それはつまり自然環境の魅力でもあります。人によって様々な受け取り方ができるでしょうが、主だったものを整理してみましょう。

1) 「不便」の中にある楽しさ

自然の中では雨も降れば風も吹きます。暑さも寒さも自分の思うようにはなりません。建物の中にいればそれらはコントロールできるものかも知れませんが、自然の中では自分の思うようにばかりいかない不便さがあります。

そのような不便な環境の中に、人はなぜわざわざ出かけていくのでしょうか？ 人はその不便な環境の中で自分の力を試したり、自分の能力を発揮できることに喜びや満足感を感じるのではないのでしょうか。

アメリカの心理学者 A. H. マズローは、人間が本来持っている高次の欲求として「自己実現の欲求」というものをあげています。これは自分になりうるものになりたい、自分の持っている力を十二分に発揮してみたい、自分の力がどこまで発揮できるのか試してみたいという欲求だと考えられます。

私たちの日常は、先にも述べたように機械化が進み、誰でもボタンさえ押せば様々なことが可能な社会になってきました。別な見方をすれば、自分自身も機械の一部となり、誰と替わっても支障がないようにシステムが組み立てられているとも考えられます。そのような社会では、自分の力を発揮するとか、自分の能力を試すといったことはできなくなります。

そしてそのような日常から開放され、人間本来持っている欲求を満たすために、自分の力を最大限に発揮できるのが、自然の中での様々な活動になるのではないのでしょうか。

自然の中にある様々な不便さ、人の力ではどうしてもできないものに対して、自分の持っている知識や力、経験を総動員してかかわれるところに、人は日常生活では味わえない楽しさや満足感を感じるのではないかと思います。



2) 「原体験」を呼び戻すアウトドアライフ

森の中を歩いていると、なぜか心が落ち着き、疲れもいやされるような気持ちになります。波の音や林を抜ける風の音に人は気持ちを開放し、リラックスできます。なぜ人は自然のそのような景色や音に癒されるのでしょうか？

人類学者の河合雅雄は、人類の祖先は森の中での樹上生活者であって緑に包まれて暮らしていたので、現代人も緑のないところでは落ち着かずイライラし、緑の中でこそ初めて安心感に浸れるのだと述べています。私たちは本来持っている本能のレベルで、自然とのかわりを欲しているのかも知れません。

また、子どもの頃の木登りをして高いところから見下ろした経験や、川で遊び、森の中で基地を作って遊んだ経験。カブト虫やザリガニを捕まえてきては箱に入れて飼った経験等は、子ども時代の楽しい思い出として残っているだけでなく、人の人格形成に大きな意味を持つ原体験だと考えられています。



大人になるにしたがってそのような経験から遠ざかり、忘れていってしまったことが、日常生活における不安や不満につながっているのかも知れません。

そんな時、自然の中での様々な体験を通して、自分自身の原体験が鮮やかに蘇ってきます。それは本当の自分を思い出すことであり、本来の自分に気づくことでもあります。

自然の中でのアウトドアライフは、自分自身の原点である様々な原体験を呼び戻し、安心感と満足感と、そして楽しさを与えてくれるように思います。

3) スローライフとアウトドアライフ

「スローフード」「スローライフ」という言葉がマスコミに取り上げられるようになってきました。ただ「遅い」とか「ゆっくりとした」という意味だけでなく、文化人類学者の辻信一はこの「スロー」という言葉の中に、「エコロジカル（生態系によい）」とか「サステナブル（持続可能な、永続性のある）」という意味を込めて使っています。生態系とか、持続可能といった考え方は、自然保護、環境保全の基本をなす考え方です。

「ファーストフード」に対峙する言葉としての「スローフード」。それは飽食の時代といわれる現代社会の大量生産、大量消費に対する警告を意味しています。自然の素材から吟味し、人工的なものを排除し、自らの手で作る楽しさと味わう楽しさを大切にしていこう、そんな「スローフード」のあり方は、まさしくアウトドアライフにつながるものではないかと思えます。

自然の中で日常の喧噪から離れ、住む場所と集う場所を自らの手で作り上げていくアウトドアライフは、スローライフの一つの実践でもあると思えます。確かにそれは一時的な遊びの世界であるかも知れませんが、その場だけのスローライフ体験なのかも知れません。中には自然の中でも日常を引きずってきってしまう人もいます。でもそのような形であっても、自然の風に吹かれ、大気の変化を感じながら、夜の真の闇を体験するアウトドアライフの経験は、私たちにとって、本当に必要なものとは何かを気づかせてくれる機会になるように思います。

自然の時間の流れを感じ、自らの手で様々なものを作り上げる楽しさを味わう時、人は楽しさと同時に、幸福感を感じるのではないのでしょうか。

アウトドアライフは、私たちに様々な満足感や達成感を与えてくれます。日常生活から離れ気分転換の一つとして楽しみを感じる体験でもあります。からだを心をリラックスさせ、健康的な生活につながる活動でもあります。同時に、自然の中での生活は、私たちにとって本当に必要なものは何かということを考える機会にもなるのではないかと思えます。

アウトドアライフが自然を破壊する

アウトドアライフは私たちに様々な楽しみを与えてくれますが、一方、私たちはその自然環境に対してどのような影響を与えているのでしょうか。

ナチュラルリストの柴田敏隆は様々な野外活動を自然とのかかわり方から分類し、これまで行われてきた従来型の野外レクリエーションを自然破壊汚染型野外活動だとしています。夜になるとキャンプファイヤーと称して人も近付けない程の過剰な火を燃やし、ライトアップをし、打ち上げ花火を楽しむ。このような活動は人工的な光により周囲の動物たちに多大な影響を与えていると指摘しています。

モーターやエンジンといった人工的な動力を使って自然の中を走り回ることによる害。都市の便利さを求めて建設する構築物による害等、多くの人が自然の中に入ることによってもたらされる自然破壊もまた、多くの人たちによって指摘されています。

また尾瀬ヶ原では、たくさんの人たちが訪れるために、し尿処理が追い付かず、遊歩道も踏み荒らされ、広げられてしまうといったオーバーユース（過剰利用）の問題が生じている場所もあります。

表1 自然との関わり方による野外活動の分類

野外活動の分類	野外活動の内容
自然破壊汚染型野外活動 光による害 音による害 大気の汚染 人工的動力を用いる害 構築物による自然破壊	従来型の野外レクリエーション 過剰に大きな火（ファイヤーストーム） ライトアップ スピーカーの乱用 打ち上げ花火 カラオケ 自動車の騒音 生火の煙 排気ガス 花火の火薬臭 ゴミの腐敗臭 スノーモービル ジェットスキー オフロード車 スキー場 キャンプ場 都市型便利さを完備したリゾート施設
自然順化型野外活動 人工的動力を用いない野外活動	クロスカントリースキー カヌー カヤック サイクリング セイリング 自然体験 自然観察
自然保護復元創出型野外活動	生態の研究調査 ネイチャートレイルの策定 森林保全 サンクチュアリ作り

(柴田敏隆氏講演記録より作成)

その多くは、自然に対する知識が未熟であることにその原因があるのではないのでしょうか。どのような自然に対してどのような関わり方をしなければいけないのか、その見きわめができないままに、単に自分が楽しければそれでいいという考え方では、自然を楽しめるのは一度きり、二度と自然の豊かさを楽しむことができなくなってしまいうでしょう。自然の再生能力をこえた利用にならないような細心の注意が必要になってきます。

では、そうならないために自然の中に立ち入ることを止めて、自然を遠くから眺めるだけにした方がよいという考え方もできるかも知れません。しかし、自然が私たちに与えてくれる様々な恩恵は先にも述べた通りですし、本物の自然を知らずに、自然保護を唱えることは、真の自然保護の活動につながらないのではないのでしょうか。自然の恵みを直接感じ、その価値を知ること、自然に対して本当のかかわり方を実践していけることになると思います。

自然と共生するアウトドアライフとは

私たちも同じ地球に生きる生物の一つとして、様々な自然と共生しながら生きていく術を考えていかなければなりません。自然の恩恵を受けに自然の中に立ち入った時、その自然を破壊し、二度と楽しむことのできないものにしてしまうのでは、私たちのアウトドアライフは非常に空しいものになってしまいます。都会に住んでいる人が、豊かな自然の中でアウトドアライフを楽しむために配慮すべき事柄について考えてみましょう。

1) ローインパクト/ミニマムインパクト

アウトドアライフにおいて活動場所である自然環境に対して配慮する際の基本は、「ローインパクト」「ミニマムインパクト」の精神であるといわれています。つまり活動エリアの自然環境に対してできるだけ影響を与えないようにするという考え方です。

アメリカの環境保護団体であるシエラクラブは、ウィルダネス・マナーズという名称でローインパクトキャンプを提唱しています。またアメリカの野外活動指導者の養成学校であるNOLSでは Leave No Trace (後には何も残さない) をキーワードにミニマムインパクトキャンプを実践しています。主にキャンプサイトやトイレ、火の扱い方、自然の中での行動の仕方等についてその指針を設けておこなっている日本においてもその考え方をもとに、日本の自然環境にあった形での様々な方法が実践されてきてい

ます。ローインパクト／ミニマムインパクトの考え方は、その前提として自然の持つ自己回復力に壊滅的な影響を与えないようにするためにはどうしたらよいかということがあります。従って自然の状態をしっかりと知ることから始まります。微妙なバランスの中で生態系を保っている自然では、ほんの小さな影響でもその自然が回復できない場合があります。また日本のように雨が多く湿度が高いところでは、植物等の再生力も強く、多少の影響を受けても回復する力を持っている場合もあります。

そのような活動エリアの自然をよく理解し、そこで最善の方法をとることがアウトドアライフを楽しむ人々に求められてきます。特に考えなければいけない事柄としては、①自然の中で火を焚くこと。②ゴミの処理。③汚水の処理。④洗剤の使用法。⑤トイレ。⑥キャンプサイト。⑦活動エリア。⑧採集活動等があげられています。

例えばトイレの問題について考えてみましょう。トイレがないエリアでは、穴を掘って処理するというのが一般的ですが、その場合も水源から少なくとも60m以上離れること。穴の深さは15～20cmは掘ることなどが求められます。もちろん使用したペーパーなどは袋に入れて持って帰ります。しかし、利用者が多く自然による分解が追い付かないような場合や、乾燥した地域や冷涼な地域ではバクテリア等の働きが少ないので、排泄物を全て持って帰るという方法もとられたりします。小動物等が多い地域などでも掘り返されてしまう危険性があるようなところでは持って帰るという方法がとられたりします。

このようにローインパクト／ミニマムインパクトという考え方には、一つの決まったルールがあるわけではなく、その自然の状態や利用している人たちの状態などを判断しながら、アウトドアライフを楽しむ一人ひとりがその自然に対して、人間の影響を最小限に押さえたいこうとすることが大切になります。

自然と共生するアウトドアライフの新しいスタイルとして

自然と共生するアウトドアライフとしては、様々なアウトドアスポーツやキャンプといったものだけではありません。これまで滞在型の旅行の形態として名所旧跡を訪ね歩く観光を目的とした旅行がありましたが、都会に住む人たちの自然に対する欲求、自然環境を守ろうとする意識の高まりの中で、単に珍しいもの、美しいものを見て歩く旅行から、グリーン・ツーリズム、エコツーリズムといった新しい旅行のスタイルが生まれてきました。

1) グリーン・ツーリズム

グリーン・ツーリズムとは、緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ、滞在型の余暇活動として行われるようになってきたものです。つまりこれまでの名所旧跡を、点として見て回るというのではなく、その地域に残った自然の景観や文化、人々の暮らしをのんびりと滞在しながら実際に自分自身で体験することを中心においた旅の形態と言えます。

農村では農作業や酪農体験など、山村では森林の伐採や下草刈りなど、また漁村では漁師と一緒に船に乗ったりといった、そこでしか体験できないものを行いながら、その地域の自然や文化を理解し、地元の人との交流を楽しむことを目的にしています。

つまり過疎化が進む農山漁村において特別な観光資源をつくり出すことではなく、地元の人たちに過度な負担をかけずに、都会からきた旅行者に、そこでの日常的な労働や生活を体験してもらうことを楽しんでもらう。そんな余暇の過ごし方を提唱しています。農林水産省においては、グリーン・ツーリズムを農山漁村の活性化、都市と農山漁村の共存関係の構築のためのひとつの重要な施策として位置付け、積極的に取り組んでいます。

2) エコツーリズム

都市化が進む現代社会において、豊かで神秘的な自然が残る自然公園や秘境といわれる場所への旅を求める人が増えてきました。しかし一方たくさんの方が訪れることで地域の自然環境や地域社会への影

響が問題視されるようになってきました。観光客目当ての開発で地域の生態系のバランスが崩れるといった問題も生じてきました。エコツーリズムとは、訪れた先の自然環境を破壊することなく、その土地特有の自然や生活文化などの資源を持続させていこうとする旅行の形態です。

エコツーリズムは、豊かで荒らされていない自然を持つフィールドで、その土地を訪れる旅行者が、その地域の自然や文化について正しい知識を得て、その地域ならではのふれあいを体験できるような旅行をさしています。そして旅行者やその地域の人々に、自然や文化の保護の意識を育むと同時に、その地域への経済還元を成立させることで、その土地の自然環境や文化をかけがえのないものとして守り、活用し、維持していこうとするものです。

小笠原諸島でのホエールウォッチング、伊豆七島御蔵島のイルカウォッチング、屋久島の屋久杉の森、石垣島白保の珊瑚礁など日本にも世界に誇る豊かな自然があります。このような場所では、単に観光客にその自然環境を見せるだけでなく、その自然環境を守るために自主的なルールを作り、その地域の生態系をも含めて保護しながら、観光資源として活用していく方策をとっています。

都会から自然環境が失われ、忙しい時間の中で日常生活を送る現代人にとって、豊かな自然の中で、ゆったりとした自分らしい時間を過ごすということは、健康的で健全な生活を営む上でとても大切なことです。しかし、何の知識も持たず、都会の日常感覚を自然の中に持ち込むことは、その豊かな自然を破壊していくことにもなります。私たちに様々な楽しみを与えてくれる自然を、私たちの世代で終わりにすることなく、長く自然と共生しながらアウトドアライフを楽しむために、今私たちがしなければならないことを始めていく必要があるのではないのでしょうか。